



神のために

今年最後の巡礼の道

長女リカが広島市の保健師を辞め、パレスチナの貧しい母子の保健プロジェクトに携わるために現地に住み始めたのは一九九五年のことである。

その二年前の一九九三年、イスラエルとパレスチナの和平合意が成立(オスロ合意)。世界の火薬庫と言われた中東に平和が訪れるという機運が生まれ、娘

も希望に胸をふくらませて現地向かう。しかし紛争は今日に至るも解決せず、七年後の二〇〇二年に帰国した。パレスチナ支援の活動は継続するが、日本でもう一度勉強するためであった。

欧米のNGO関係者はドクターなどの資格を持つ人が多く、娘も博士の資格を取るため東京大学大学院に入

学、パレスチナ支援はJVC(日本国際ボランティアセンター)のパレスチナ担当として年数回、現地を訪れ、活動を継続した。

国際ソロプチミスト下松は当初から娘のパレスチナ活動を支援して下さり、この間に国際ソロプチミスト「女性ボランティア賞」なども受賞する。今年も国際ソロプチミスト下松・認証二十年の年

で、先日、周南市の遠石会館で記念式典が開かれた。



式典受付のソロプチミスト下松の皆さん

ズクラブなどの奉仕団体への参加者は減少しているという。ソロプチミスト下松も現在は十八人、それで前記の記念事業や継続支援活動をすすめるのは資金的にも負担も大きいと推察される。にもかかわらず長期にわたり娘の活動を支援して下さり感謝あ

記念事業として市内の三つの小学校にトイレ用ベビータオル贈呈

や、返金不要の緊急支援基金「女性と子供のためのソロプチミスト下松基金」を設立。さらに娘リカをはじめ七つの団体に支援金が贈られた。

式典には、出席できない娘の代理として私が参加したが、そこで初めて知ったことがある。

「ソロプチミスト誓約」の最後に「：国家のため、神のために努力いたします」という言葉があったことだ。多分、設立時のメンバーにクリスチャンの人がおられたからだ

ところが科学が発達した二十一世紀の今日、日常生活の中で、また価値観で「神の存在」を意識することは非常に少なくなっている。

いわゆる「神は死んだ」とか「神不在」という言葉に象徴される世の中になつてい

私ソロプチミストの誓約の中に「神のために」という言葉があったことに喜び、敬意を抱き、私自身も新しい年をその理念を大切に、一人の人間として謙虚に生きたいと思う。

が、人間は万能でなければ、偉大な存在でもない。むしろ科

と思うが、私にはうれしい言葉だが、一般的には誓約の中に「神のために」という表現は珍しいのではないだろうか。

前回までの「サビエル展シリーズ」のサビエルは神を信じ、そのために自分の生涯を尽くした人だ。今、ヴィクトル・ユーゴの「レ・ミゼラブル」を読み直しているが、この大作も神の存在ぬきにはありえない。

学が発達した今の世の中にこそ、人間を超えた真理である神に目を向け、神のレベルに希望を託す謙虚な人間として生き方が求められているのではないだろうか。



支援を受けた八団体 (原田会長の右隣りが筆者)